

文明が衰亡するとき

高坂正堯



新潮選書

私は、子供のころから、このような本を書いてみたいと思って来た気がする。文明の興亡に私は関心を持って来た。ひとつの文明が生れ、発展し、衰え、やがては亡ぶ。その運命、とくに衰亡について何故だろうと考えるのが私は好きだった。その答えがありそうでないところに魅力があった。いろいろと考えさせられ、空想をかき立てられるのがうれしかった。衰亡論の値打ちは多分そこにある。それはわれわれに運命について考えさせる——所詮判らないものではあっても。 著者

文明が衰亡するとき

高坂正堯

新潮選書



ぶんめい すいぼう
文明が衰亡するとき 〈新潮選書〉

©Masataka Kôsaka Printed in Japan, 1981

昭和五十六年十一月二十五日発行
昭和五十六年十二月二十五日三刷

定価八〇〇円

著者 高坂正堯こうさか まさたか

発行者 佐藤亮一

印刷 株式会社三秀舎
製本 植木製本株式会社

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 業務部(03)二六六一五一
編集部(03)二六六一五四
振替 東京四一八〇八番

(乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付)
下さい。送料小社負担にてお取替えます。

文明が衰亡するとき／目次

序章	いま、なぜ、衰亡論か	7
----	------------	---

第一部 巨大帝国ローマの場合

第一章	美徳の喪失	17
-----	-------	----

ギボンからウェーバーまで
軍団の力を弱めたもの
誇り高き共和政の
変質

第二章	大衆社会状況の出現	46
-----	-----------	----

輝かしき五賢帝時代の叡智
繁栄を支えるエリート
の精神
政治文化に
忍び寄る頹廢

第三章	巨大なものの崩壊	62
-----	----------	----

財政破綻から始まった
増税と不公平税制の結果
それ自身の重みに圧
せられて
危機意識がローマを
振り返る

第二部 通商国家ヴェネツィアの栄光と挫折

第一章	小人工島国の興隆	85
-----	----------	----

干潟の上の絢爛たる国
巧みな外交の勝利
商業活動に見る秀れた知恵
野心と専横を許さぬ政治体制
際立つ社会組織能力

第二章	繁栄を襲った試練	116
-----	----------	-----

優位条件の静かな変化	逆境からの脱出の努力	造船能力の低落	回
復力を失うとき			

第三章	豊かな社会の内なる変化	136
-----	-------------	-----

守旧的性格の増大	通商国家の脆弱性	自由で強い精神の衰弱
----------	----------	------------

第三部 現代アメリカの苦悩

第一章	戦後アメリカの都市の盛衰	161
-----	--------------	-----

都市論の意味	郊外化がもたらした罪	「戦後」に描かれた夢	最先
進国のアイロニー	「再生」可能を示す成熟		

第二章	優越の終り	183
-----	-------	-----

分水嶺となつた一九七一年	理想主義の敗北・ベトナム戦争	トランス
ナショナリズムの自己矛盾	アメリカニズムからの脱却	

第三章	工業文明への信念の動揺	204
-----	-------------	-----

コカコラニゼーションへの憧れ	ローマ・クラブの『成長の限界』	豊
かさへの罪悪感	石油危機と南北問題	

第四章

大きな政府と活力の衰頹

威信を失った大統領府 福祉国家の疲れた政府 企業における“やる気”
の減退 近代合理主義が生んだ病い

219

終章

通商国家日本の運命

アメリカの今日をどう見るか 日本をめぐる国際構造の変化 ヴェネツ
ィアとオランダの教訓 明日の世界に生きるために

243

あとがき

272

文明が衰亡するとき

序 章 いま、なぜ、衰亡論か

成功の中に衰亡の 種子

衰亡論には、不思議に人を惹きつけるものがある。昔から今まで人々は、過去の文明について、あるいは現在の文明について、種々の角度から衰亡を論じて来た。代表的な題材であるローマについて言うなら、それはくり返して研究の対象になって来たし、またローマの衰亡との類推で、そのときの文明の運命が論じられて来た。それに、ローマが存在していたときに提出されたローマ衰亡論をあわせ考えるなら、ローマ衰亡論はほぼ二千年にわたって人々の関心を集めて来たことになる。その他の文明についての衰亡論も多い。実際、衰亡論のなかった文明や時代というものは存在しないと行ってよい。

それは衰亡論が人間のもっとも基本的な関心事に触れているからである。すなわち、衰亡論はわれわれに運命を考えさせる。人間はだれでも未来への不安と期待の二つを持っている。それはわれわれが有限の存在だからであろう。人間はだれでも、自分の死んだ後、自分のしたことはどうなるだろう、と考える。そして、自分のしたことが受け継がれ、世の中がよくなることを期待しながら、他方よいものはこわれるのではないかという不安をぬぐい去ることはできない。

文明の衰亡の物語はこうした心情あるいは関心に訴える。秀れた強力な文明は、その最盛期に

おいて永遠に続きそうにさえ見える。しかし、その文明が徐々に綻びを見せ、力を弱め、衰頹して行く。どうしてそうなったのかは、われわれの関心をかき立てずにはいない。

そして、衰亡の原因を探索して行けば、われわれは成功のなかに衰亡の種子があるということに気づく。多くの衰亡論の主題はそうしたものであった。たとえば、豊かになることが、人々を傲慢にし、かつ柔弱にするので文明を衰頹に向わせるということ、何回も何回も論じられて来た。『国富論』の著者アダム・スミスでさえ「野蛮国民の民兵」が「文明国民の民兵」に対して「不可抗的な優越性」を持つと書いた。それは今日の人々の多くにとって意外であるだろう。しかし、富の衰頹効果はそれほど広く認められて来たことなのである。同様に、スミスのやや先輩のデイヴィット・ヒュームは、芸術や科学について、それらは完成すれば衰頹に向うと論じた。一旦完成されれば、次の世代はより秀れたものを作りうるという自信を失い、公衆も新しいものに関心を示さなくなるからである。

だから、衰亡論は、なによりもまず、成功した者を謙虚にするであろう。ローマの興隆の過程を描いた歴史家ポリビウスは、アレキサンダー大王の成功のすぐ後、運命のうつろい易さを指摘していたデメトリウスの言葉を、彼の主著『歴史』の終りの部分で引用した。

「われわれの生きているこの時代に、ペルシア人——ほとんど全世界を支配していたあのペルシア人の、名前すら消し去られてしまい、そして、以前にはほとんど名も知らなかったマケドニア人が、全体の覇者にのしあがるといふことを、五十年前にペルシア人やペルシア王が、あるいはマケドニア人やマケドニア王が、信じていたかもしれないなどと、貴方は考えられるだろうか。だが、それにもかかわらず、人生と妥協することの決してないこの運命、われわれの見積りをいつも新しい打撃で突き崩してしまうこの運命——この運命が、そうした祝福を彼らに貸付けてお

くだけで、やがては、別の配分の仕方をとるように決めるのだということを、あらゆる人間に分からせる時が来るだろう」

彼はまた、第三次ポエニ戦役でカルタゴの息の根をとめたローマの將軍スキピオが、燃えるカルタゴを見ながら述べた、「勝ち誇るローマも、いつかは同じ運命に見舞われるだろう」という言葉を「これ以上に政治家らしく思慮深い」発言は見つけ難いと評した。衰亡論の与える運命の感覚は人間を思慮深くする。

上りつめた日本の

未来

しかも、衰亡の物語は複雑な物語である。衰亡の過程は一直線ではない。

衰えを見せた文明がまた活力を取り戻すことは何回もあるし、解き難い問題ををかかえ、力に衰えを示しながら、長期にわたって生き長らえることも少ない。したがって、衰亡の原因を単純明快に論じたものは、警句として真理を持つが、しかし、文明の衰亡を十分に説明するものではない。

衰亡の物語は、さまざまな種類の衰亡原因の複合的物語なのである。ギボンの『ローマ帝国衰亡史』が今日もなお名著と言われるのは、彼がさまざまな時に始まり、異なるテンポで進行する衰亡の過程を描くことによって、衰亡の過程を捉えたことによるところが小さくない。そして、このギボンの注目した衰亡の過程の性格故に、衰亡は一直線ではないのである。力が増大するとは共和政の美德を失わせ、自由を傷つけるかも知れない。しかし興隆はその文明を豊かにする。その豊かさが長い目で見れば衰頹の種子となるとしても、しばらくの間それは人々にさまざまなことをおこなう資源を与える。そして、経済が活力を失い始めたとき、人間はしばしばより賢明に、かつ巧妙になる。だから、力が相当低下して、なにをやるにも力不足になるまで、経済が衰え始めても、文明はつづく、といった具合である。

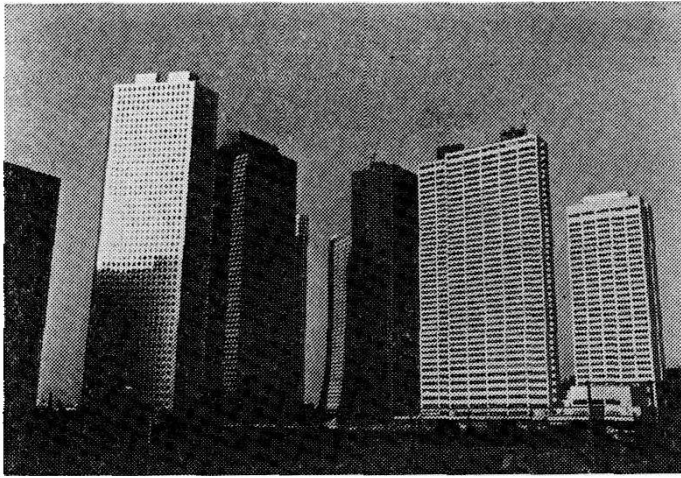
だから、衰亡論はわれわれに運命のうつろい易さを教えるけれども、決してわれわれを諦めの気分におとし入れることはなく、かえって運命に立ち向うようにさせる。衰亡論は人間の営みがどのように発展し、浮沈を伴いつつ続き、しかもなお終りを迎えるかを、そしてその後がどうなるかを示してくれる。それは、われわれにその有限性と共に、それ以上のなにものがあることを教えてくれるからである。

人間に不滅なものへの憧れがある以上、そうした感覚で十分ではなからうか。未来への信念を持つということは、結局のところ判りえないものを強引に信ずることである。それよりも衰亡論の与える知恵の方がわれわれを正しく導くのではなからうか。そして、このような衰亡論の与える未来への感覚を、今日われわれは必要とするのではなからうか。

ここで、話は現代のことになる。

まず、日本の急速な興隆が、私に運命を考えさせる。一九七〇年代の半ばに、日本は明白に「経済大国」となった。今や、日本は秀れた製品を安価に作ることができ、したがって、輸出を伸ばすのに、なんら困らない。しかも、少し前までは中級の工業製品を巧く作ることに秀でてはいても、時代の先端を行く高度技術製品についてはまだ弱かったが、今ではコンピューターなどでも、アメリカと激しく競争するようになっていいる。

経済の規模も大きくなった。実際、日本のGNPはソ連のそれにほぼ匹敵し、したがってアメリカに次ぐ大きな経済となったのである。十年ほど前日本が自由世界第二位になったとき、その事実がしばしば報じられたが、しかし、それは大して重要なことではなかった。それは日本のGNPがドイツ、フランスのそれを上廻ったということである。しかし両国の人口は五、六千万であり、それが作り出す富よりも一億余りの日本人が作り出す富の方が大きいということはとくに



日本の高度成長の象徴、東京新宿の高層ビル群

驚くに値いしない。それに、はるかに大きいアメリカやソ連の経済が上にあった。ところが、日本のGNPは今やソ連のそれを僅かに下廻る程度であり、アメリカの半分である。それは世界のなかで大きなウエイトを持たざるをえない。それに日本の人口はアメリカの半分強だから、GNPが半分ということは、一人当りGNPがアメリカとほぼ等しいことであり、日本の経済が質的にも高いものとなったことを示している。

こうした姿は、三十六年前に日本が敗れたときには夢だにできなかったものである。二十年前でさえ、今日の状態は予想できなかった。高度成長が始まる前の一九六〇年の日本のGNPはアメリカの十分の一、ドイツの六〇パーセント、フランスの七五パーセントにすぎなかったのである。いや、高度成長で日本人が自信を回復した六〇年代の終りでさえ、やがて日本が経済大国になるだろうという予測が出たとき、ほとんどの日本人は喜びながらも半信半疑であった。日本は目ざましく興隆したのである。スキピオやデメトリウスにならって、運命のうつろい易さを想起することが、これほど必要なきはあるまい。

欧米文明の不吉な 罅

より大切なのは第二の状況である。すなわち、日本の興隆とは逆に、ヨーロッパ文明、あるいはアメリカをも含めて西欧文明が、衰頹期に入っただけと思われる節があること

である。たとえば工業製品について、アメリカやヨーロッパでは、日本では考えられないような欠陥商品が現われ始めたが、それは工場の紀律の弛緩を反映している。日本を除く他の先進工業諸国では犯罪が増え続け、夜の町を歩く楽しみを奪われた人々も少なくない。

そしてなによりも一九七〇年代には、アメリカが代表する近代工業文明への信念がゆらぎ始めた。近代化を進めて行き、人々の生活を豊かに便利にして行くことへの信念は、第二次世界大戦後の世界におけるもつとも基本的な理念であった。さらに言えば、それは近代社会の基本目標であった。それが一九五〇年代と六〇年代に、ひとしきり熱心に追求された後、一九七〇年代に疑われ始めたのであった。

もつとも、その疑問は一樣なものではない。ある人は、石油や食糧といった資源の壁に人類がぶつかると考えた。またある人は、その壁を乗り越えることはできても、人類は公害によって破局を迎える危険があるとした。さらに、経済成長そのものの望ましさを否定する見解も出された。経済成長によって人間の生活は豊かになった点もあるが、その代り、美しい自然、ゆったりした生活のテンポ、仕事への喜びといった貴重なものが失われたのではないか、といった議論である。経済成長の望ましさをそのものを疑問視する議論は、共感を集めても賛成する人はそう多くない。しかし、経済成長の持続を困難視する考えには、かなり多くの人が同意した、いづれかのしかたで、ほとんどの人が近代工業文明への疑問を持つようになったことは間違いない。そして基本的理念への疑問の始まりは、どの文明にとつてもきわめて重大なことなのである。

もちろん、簡単に衰頹という断定はできない。しかし、西欧諸国についてより深く分析するならば、衰亡の兆という直観が当たっている面が少なくないことが理解されるだろう。もしそうなら、そこに交錯現象があることになる。日本が興隆したのは、日本がそのモデルとした西欧諸国にお

いま、なぜ、衰亡論か

いて、近代工業文明が深刻な問題をかかえるようになったときだということになる。その交錯現象はなにをもたらすのであろうか。

私は以上のようなわけで衰亡論への関心を持つ。まず、代表的な衰亡論としてローマを扱い、次いで特異な国家ヴェネツィアの衰亡を考察し、最後に現代文明について考えることにしよう。

